

## 日本災害情報学会 第12回災害情報勉強会（概要）

- テーマ：「災害取材を振り返って」
- 講師：伊藤和明氏（元NHK解説委員・防災情報機構会長）
- 開催日：2011年1月31日（月）
- 会場：（財）河川情報センター会議室



伊藤和明氏はNHKの科学番組のディレクター、解説委員として50年近く国内外の災害の取材に関わってこられた。伊藤氏の歩みは日本の「自然災害取材史」とも言えるもので、今回の勉強会では、火山と地震を中心に、貴重な体験やエピソードをうかがった。

### ■天文少年から地質学へ

子供のころは天文少年で、当時有楽町にあったプラネタリウムに通い続けた。東大に入ったが、物理の計算が苦手だったために、地質学へ転向。昭和33～34年ごろ、東京大学教養学部の助手のときに、地学の専門家としてNHKの科学番組のディレクターに引上げられた。

### ■初めての海外の災害取材はアラスカ地震（1964）

1964年3月のアラスカ地震は、20世紀ではチリ地震（1964年）に次ぐ大地震。アンカレジで大きな被害が出たほか、コディアック島では大津波で漁船が1キロほど内陸まで打ち上げられていた。

### ■新潟地震（1964）

アラスカ地震から帰ってきたら、6月に新潟地震が発生。この地震を契機に「液状化現象」が一挙に注目を浴びた。4階建ての県営アパートが横倒しになったのはよく知られているが、現地では「液状化」という言葉は一つも聞かず、耐震工学の専門家も地震の揺れで倒れたと言っていた。新潟地震の液状化現象の被害分布を地図に落としてみると、信濃川の旧河道と一致していた。砂で埋め立てて都市開発した結果、大きな災害となって返ってきた。どこの地域でもこうした開発は行われており、液状化対策は真剣にやらなくてはならない。

### ■米国・セントヘレンズ火山噴火（1980）

国内外あちこちの火山に行ったが、最も強烈な印象が残っているのが米国に西海岸のセントヘレンズ火山。3月の終わりごろから噴火が始まり、マグマが上昇。山体の北側が非常に不安定になっていた。5月18日に浅い火山性地震をきっかけに「山体崩壊」が起き、「ふた

が取れた状態になって噴火につながった。この崩壊の過程をとらえた連続写真は、現地のテレビ局が持っていたのを私が入手したもので、NHKでもたびたび放送された。山体崩壊に伴う岩屑雪崩と爆風の被害はすさまじく、20世紀の火山災害でも特筆すべきものだ。

### ■長野県西部地震（1984）

この恐ろしい「山体崩壊」が日本で起きたのが4年後の長野県西部地震。噴火ではなく地震のショックで御嶽山の尾根の部分が大きく崩壊。岩屑雪崩が10キロも流れ下り、温泉宿とその一家4人を飲み込んだ。

### ■メキシコ地震（1985）

震源から350キロも離れたメキシコシティでは、20階建てぐらいのビルに大きな被害が出た。これは今問題になっている「長周期地震動」によるものだった。

### ■コロンビア・ネバドデルルイス火山（1985）

火砕流の熱で氷河が融け、大規模な泥流となって山麓の街を襲い、25000人もの死者が出た。取材してみると、現地では泥流に備えて立派なハザードマップがあったが、生かされていなかった。これの災害を契機に、日本では十勝岳のハザードマップが作られた。

### ■伊豆大島火山噴火（1986）

大学時代に中村一明先生と一緒に伊豆大島の噴火史をまとめあげたため、自分の島のように思える。この時は山頂ではなくカルデラの割れ目噴火で火柱が立った。当時の大島町長は、ヘリの望遠レンズで撮影した噴火の映像を見て、全島避難を決断したということを知った。

### ■有珠山噴火（2000）

有珠山が噴火した2000年の3月31日は、私がNHKの解説委員を辞める日。夜のニュース解説をやっていて、日付が変わってしまったが、やむなくそのままの肩書きで続けたというエピソードがある。危険地域の住民が噴火前に全員避難をし、人的被害はなかった。洞爺湖の風景や温泉など火山の恵みを享受する一方で、将来の防災を常に考えていかなければならない。このほか、雲仙普賢岳（1990～1991）台湾・集集地震（1999）なども取材した。

### ■取材を通じて感じたこと

人と自然の時間の目盛りは違うことを認識しておくことが大切だ。例えば、阪神大震災を起こした断層系も、歴史時代に地震を起こしていなかったのに、人間側は「地震がないところ」だと思いこんでいた。地震災害のパターンは、「季節」「時刻」「気象」の3つの要素で決まるのではないかとも思っている。

（NHK報道局災害・気象センター 入江さやか）